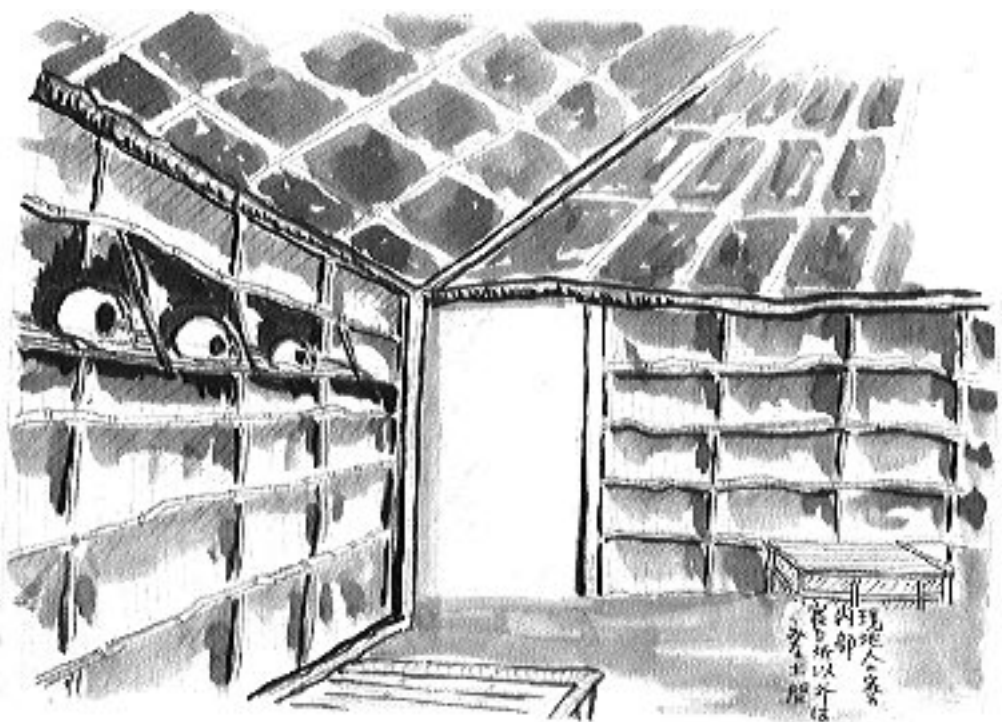


第十六回

毒蛇

海岸近くには二三つ現地人の家を見つけ、用心しながら近づいて行くと、そこまじかへ避難しているのが、人影はなかつた。

ある家の中に入って驚いた。柵の上には誇りげに龍巖とくろくがずらりと並んでいるではないか。われわれも見つかれば、同じにされるのかと思つた。



「ここで思いがけないものを見つけた。日本海軍の駆逐艦「照月」と書いてあるオススタッフ（金屬製の洗濯桶）と将棋のこま。香車、桂馬、歩七枚があったのには驚いた。

オススタッフは不良練習生が、親元へ電報で、オススタッフナクシタ、カネオクレ」と訳のわからないことを打って、さぞ重要なものをなくし困っているだろうと親を慌てさせ、送金させる手立てにも使われた言葉だ。

「照月」が沈没するときにこれらのものが投げ出され、海上を沈まずにただよい、海岸へ流れ着いたものが拾われたものか？

あれから九十日近く敵の来襲に怯え、日本の兵隊に会わずにいたわれわれにとつては、戦没された照月の人たちを偲ぶといつより、自分たちも使ったことのある日本人の物品を思いがけないところで発見して、ただただ懐かしく、涙が流れてとまらなかつた。

「この家でもこもを掛けて隠してあるものをみつけ、棒で払い除けてギョー！となり、思わず立ちすくんでしまった。

「な、なんだ！誰だ？」私の眼の前を立ちぶさがるように、異様な風体の奴が突っ立っているのに、ドキリとした。髪は山あらしのようになつて逆立ち、左右の眉毛は太い一ノ字のようになつて一本になり、ぎよる眼でこけた頬は髭ほつぽつ。

幽霊か？

現地人？

でもない異様な風体の奴がわたしをじつと睨んでいる。自分のつしるに誰がいるのでは、とんでも振り返つてみたがここには誰一人いない。

自分が動けば相手も動く鏡に映る自分の現在の姿と分かるまでには、数分かつた。九十日前の戦闘状態と同じように、張り詰めた気持ちのまま、今日まで生き延びてきた自分のいまの姿をあらためて眺めて、急に情け無く、張り詰めた気持ちがいつへんに萎えていった。



家の奥へ入って麻袋を取ろうとして手を出すと、ヒクッと近くで何かが動いた。眼をこらしてよく見ると、家囲いの細い留め木の上へ、木と同じ茶色の毒蛇が鎌首をもたげて、「こちらがもう一度手を出したら飛び出す」と待ちかまえていた。

危機一髪！。

生かしておけばこの次は噛みつかれるかも知れない。わたしは根っから蛇が大嫌いだ。た急いで棒でたたき落とす気でも狂ったように、包丁を振りあげて滅多切りに切り刻んでしまった。

あの時あの毒蛇に噛まれていたら、わたしの命は「こ」で終っていたかも知れない。そう考えるといまでもそおとと身内が恐ろしくなる。

「この家にも食べ物がないもなし。」となつたら砂糖きびでもかじるしかない。外に出た。「この頃は食べ物にまるつきりありつけず、下痢をし、体は衰弱、体力がなくなつて走ることができない。」

足腰がぶらぶらして杖をつかなければ歩けなくなつていた。

くっく